

資料

乳幼児に話しかけること・褒めることの大切さ
- 子育て支援のためのエビデンスを求めて -山本 千紗子¹⁾キーワード：乳幼児に話しかけること・褒めること、子ども向けの話し方、子育て支援、
エビデンスに基づいた子育て(EBC)

I. はじめに

子どもを意味する英語のinfantは、ラテン語のinnfans(無言の、片言の)が語源であり、「話せない(=unable to speak)」を意味している。赤ちゃん(子ども)は、自分が置かれた環境の中で周囲の人が話す言葉を獲得し、話せない状態から話せるようになり、さらには言葉を通してさまざまな能力を発展させていく。私自身の子育てや、教育者としての数多くの子ども達との関わりから、「話しかけること・褒めること」が子どもの発達や能力を促すと、経験的に直感的に確信してきた。話しかけること・褒めることは、特別の能力も道具も必要とせず、誰にでもできることである。

一方、少子社会である今日、一家庭当たりの子どもの数は少ないにもかかわらず、育児困難感を抱く女性は少なくない。特に、いわゆる専業主婦と言われる女性達に育児不安は増大傾向にあり、それが児童虐待に結びつく例も多く(保育士養成講座編纂委員会編, 2007)、児童虐待件数の増加は著しい。児童相談所が対応した相談件数は、1996年の4,102件から11年後の2007年にはおよそ10倍の40,639件に増大している(厚生労働大臣官房統計情報部編, 2009)。親子を家庭に引きこもらせず、孤立させないための支援環境はかなり整備され、子育てを社会で支援するために保育所が新たな役割を担うことになり、子育て支援の中核施設として、公的機関である「地域子育て支援センター」が保育所に併設され、子育ての相談や、子育てサークルの支援・育成、情報の提供などが行われてい

る。保育所内という立地条件が生かされ、園庭を解放したり、保育士が親子遊びなどの活動も提供している。

しかしながら、子育てに悩んでいるのは母親だけではなく、働く母親の代わりに日々子育てに携わっている保育士もまた悩んでいる。かつて保育者養成のための教育機関に所属し、現場の保育士の研究会でアドバイスおよび研究指導を行っていたが、多くの保育士から子ども達との接し方など、自分の子育て(保育法)に自信をもてないという声が聞かれた。保育士はその時その場でのケアと子どもとの関わりに忙殺される上に、子育ては結果がすぐに目に見えない一日一日の小さな積み重ねから成る営みだからである。彼らは私自身の経験に基づく子育て論に興味深く耳を傾け、「話しかける・褒める」を研究課題として数か月間実践した結果、子ども達により変化が表れたと報告してくれた。

社会全体が子育てに関する問題の早期発見に不断の努力をする必要性は自明であるが、毎日子どもと接している親自身や保育士自身の関わり方が子供の発達に大きな部分を占めることは言うまでもなく、しっかりと向き合うことができる支援が肝要となってくる。

直感的・経験的には、多くの積極的、肯定的(以下、ポジティブ)な言葉かけや働きかけが、子どもの育ちを促すと考えられるが、これを科学的に裏付け、目に見えない育ちを目に見えるものにする如果能够できれば、子育て支援や教育場面、あるいは家庭での子育てのヒントとして活用でき、子育てに悩む母親にも子ども達のケアに携わる保育士にも有用であると思われる。こ

1) 上武大学看護学部

れまで外からは見えなかった脳活動を可視化し成果をあげているものに、脳機能イメージング法の大きな進展により注目されている脳科学があるが、どのような働きかけが効果的なのかが科学的に明らかにされつつある。

子どもの能力の発達に働きかけるには、たくさんの言葉刺激が必要であると考えられるが、どのような話しかけ、働きかけが大切なのだろうか。直感と経験を単なる一私見でなく、子育て支援において説得力のある一方法として活用できるように、エビデンスを求めて、米国立医学図書館提供のデータベース MEDLINE (Medical Literature, Analysis, and Retrieval System Online) に収録されている先行研究を中心に文献探索を行った。

なお、英語の「positive」は上記のように、日本語では文脈に応じて「積極的な、肯定的な、プラスの」という意味で使われるが、本論文は英語の文献が中心であるため、基本的に「ポジティブ」という語で統一し、必要に応じて日本語表記とした。

II. エビデンス探索の結果

乳幼児にたくさん話しかけ、たくさん褒めることが子どもの発達を促し、自信を持たせることができるという直感的・経験的な印象を裏付ける知見を集約したところ、どのような話し方が子どもの注意を喚起するのか、どのようにたくさんの言葉刺激を与えると効果的なのか、褒めるといふ肯定的な関わり方をするとどのような変化が起こるのか、逆に否定的な関わり方をするとどうなるのか、が大枠でまとめられた。以下、「子どもの注意を喚起する話し方」「たくさん話しかけること」に次いで、たとえたくさん言葉刺激であってもマイナス面が多い「テレビ長時間視聴の弊害」に言及し、最後に「褒めること」について記述する。

1. 子どもの注意を喚起する話し方

子どもが言葉を獲得していく過程は音を聞くことに始まるが、それは胎児期に始まる。胎児は早くも受胎後30週頃には音が聞こえ、特定の音を聞き分けることができるようになる (Eliot, 1999; 小泉, 2006)。新生児集中治療室における胎児、新生児および早産児への音の影響に関して4,000件余の文献レビューを行った報告によると、胎児の聴力を発達させるために特別のことをする必要はない。普通の日常活動における母親の声や、母親の身体や周囲の人が発する音で十分である。補足的な音刺激は必要ないが、出生後は児に親の声を

十分に聞かせる機会を設けなければならない (Graven, 2000)。通常、人は子ども向けの話し方 (infant-directed speech) と大人向けの話し方 (adult-directed speech) を区別しており、特に母親が乳幼児に話しかける際に特有の、ゆっくりと抑揚の大きな少し高めの声による話し方はマザリーズ (motherese) と呼ばれている。出生後の新生児の脳は、聞き慣れない人の普通に話す平坦な声よりも、胎内にいるときからよく聞いていた母親の言葉にもっともよく反応する (小泉, 2006)。20人の満期産の健康な新生児の睡眠中の脳機能を比較した結果、大人向けの話し方に比べて、子ども向けの話し方に有意に脳の反応が増し、母親の感情豊かな話し方は児の睡眠中においても脳を活性化することが示された (Saito et al., 2007a)。また、同じ20人の満期産新生児の聴覚刺激要因に対する脳反応について、単調な話し方より、変化に富んだ話し方に対して前頭葉の血流が増し、言葉が発せられるときの韻律的な (prosodic) 違いを新生児は区別することができることが報告されている (Saito et al., 2007b)。これは、マザリーズが脳の活性化に意義のある働きをしていることを示唆するものである。もちろん、児は言葉の意味がわかって反応しているわけではなく、プロソディ (prosody; 韻律) という言語の音楽的要素である強勢 (stress)、ピッチ (音高; pitch)、持続時間 (duration)、抑揚 (intonation) などに反応しているのである。音楽的な抑揚やピッチの明白なマザリーズは、乳幼児にとって耳に心地がよく、子守歌に心地よさそうな反応を見せると類似している。8.5~9.6か月の32人 (男児17人、女児15人) に対して、ある母親が自分の1歳7か月の娘に話しかけると同じ話し方 (マザリーズ) をした場合と、女性実験者が普通に話した場合とを比較した結果、児はマザリーズの方を好み、耳を傾け、より長く注意を向ける傾向が見られ、マザリーズには言語習得において特別な役割があることが示唆されると報告されている (Kemler et al., 1989)。

16人の4~5.5か月児での研究では、この月齢の乳児でさえ、発せられた言葉の音を聴覚的・視覚的に一致させて認識しており、たとえ子ども向けの話し方であっても、豊かな表情の伴わない話し方は好まれなかった。しかし、子ども向けの声 (話し方) に子ども向けの顔 (豊かな表情) が伴った場合、児は子ども向けの話し方の方により大きな愛らしい反応を有意に示すと報告されている (Kuhl et al., 1982)。16人の4~5.5か月児と、16人の7.5~9か月児の2つの月齢グループを比較した研究では、両月齢グループとも、大人向けの

話し方より子ども向けの話し方の方により大きな注意をより長く向け、より感情豊かな反応を示し、話し手は男性でも女性でも違いは見られなかった。しかしながら、低月齢児グループは、高月齢児グループに比べてより多くの反応を示す傾向が観察された。より意義深いことに、子ども向けの話し方に児が示す反応の仕方や表情は、大人にその児をさらに可愛いと思わせることが示され、子ども向けの話し方は、大人と子どもの間にポジティブな相互作用を容易に作り出し維持させることが示唆されている(Werker et al, 1989)。

2. たくさん話しかけること

言葉刺激を与える時期は早いほどよく、出生と共に始めるのがよいが、言葉の量、話し方、話しかける言葉の質も重要である。大人は子供に対してシンプルではっきりと肯定的な話し方をする必要があり、子どものたどたどしい発音をまねるべきではなく、正しく発音すべきである。また、子どもが置かれている環境や状況の中で、言葉の対象や出来事が一致するような話しかけを、できるだけ頻度多く行うのがよい(Eliot, 1999)。

子どもの言語習得に、家族のどのような要素が関連するかについての研究では、32人の7~36か月児に関して、親としての関わり(parenting)の違い、たとえば子どもにどれだけ時間をかけ、注意を払い、話しかけたかの違いが、その月齢の子どもの語彙の豊かさや知能指数(IQ; intelligence quotient)と関連があることが示されたが、一方で、注意が払われることも話しかけられることも少ない子どもは、同時に話すことを禁じられていることが多かった(Walker, 1994)。その後も5~10歳(幼稚園~小学校3年生)まで繰り返し評価を行った結果、3歳児では、親から“no”“don't”“stop it”を繰り返し言われたり、多くの禁止の言葉を聞いていた子どもは、そのような言葉が少ない環境にあった場合よりも言語スキルが劣っており、小学校入学前の子どもの言語力の違いは、幼稚園~小学校3年生までの標準テストにおける「話す・聞く・読む・書く」言語力および学業成績を予測可能にするという結果が示されている(Walker, 1994)。これらの結果は、話しかけたり注意を払う量も大切であるが、親が話す言葉の質、つまり子どもへのフィードバックがポジティブであるかネガティブであるかがきわめて重要であることを示唆している。子どもには、話しかけられていることに加えて、自分の話を受け止めてもらえる会話、つまり言葉

のキャッチボールが大切であると言えよう。

言葉のキャッチボールである会話では、禁止語や否定語、yes/noで終わる質問は少なく、子どもに話を促す開放型質問が多くなると考えられるが、親子間の言葉のやりとりと子どもが言葉を学習していく過程を観察したBloomら(1996)の研究では、9か月の女兒6人と男児6人を、15か月になるまでは毎月、その後は3か月毎に平均23か月になるまで追跡し、母子のふれあいの様子をビデオに記録して分析した。その結果、子どもは母親より先に、母親は子どもの後に話す傾向があり、母親が何か言った応答として子どもが話したのは全体のわずか3分の1、子どもが話題に関連して応答したのは半分にすぎず、子どもは他の状況ですでに学んだ言葉を会話に登場させることによって、その言葉の表現や意味を学習していると報告されている。これは、子どもが言葉を獲得していくとき、自ら進んで話したい欲求をもっていることを示すものであり、親がそれを受け止めて丁寧に対応する必要が示唆される。

3. テレビ長時間視聴の弊害

たくさん話しかけることが子どもの発達に意味があるならば、子どもはたくさん言葉の話をただ聞くだけでよいのだろうか。言葉はたくさん発せられるが、一方的であり、会話が成立していない、あるいは子どもが置かれている状況の文脈に即していないものにテレビがある。子どもは意味のわからないテレビのニュース番組にさえ初めは興味を持つという。自分の方を見て話しかけているのを「自分になにかしている」と考えて、近づいて画面に触れてみるが、話をしている人は何も反応せず一方通行であることを学習すると、働きかけをやめるようになる(小泉, 2006)。言葉のやりとり(言葉のキャッチボール)が成立しないこのような不自然な関係が長期にわたって継続すること、つまり物心ついたときからテレビを毎日何時間も視聴し続けると、逆に言葉の発達上大きな弊害が生じる。特に乳児期から長時間、繰り返し一人でテレビを見ていた3歳児159人の行動を観察した1999年の調査によると、テレビ・ビデオ(TV/VTR)の視聴時間が3時間以上4時間未満が62%、4時間以上が27%であった。3歳児の90%が3時間以上視聴していたことになる。159人中の16人は外遊びより視聴時間の方が長く、乳児期から長時間TV漬けになっていた。また、1人で見る子ども10人の行動を観察した結果、言葉がしゃべれない、表情が乏しい、突然かんしゃくを起こす、友だちと遊べ

ない、視線が合わない、ごっこ遊びができない、オウム返しで言うなど、言語・情緒・コミュニケーションに関する問題が明らかにされている(土谷, 1999)。

幼児のテレビ長時間視聴について、2001年にアメリカ小児学会は、2才未満児にはテレビを見せないようにし、代わりに脳の適切な発達を促す活動、たとえば一緒に話す・遊ぶ・歌う・本を読むなど、互いに影響し合う活動を推奨している(American Academy of Pediatrics, 2001)。日本小児科学会も、2003年に首都・中核市・農村地区の3地域で調査を実施し、回答を得た17~19か月児1900人について解析した結果、①1日4時間以上視聴児は、4時間未満視聴児に比べて、有意語出現の遅れが1.3倍高く、②1日8時間以上の長時間視聴家庭の子どもは、短時間視聴家庭の子どもに比べて、有意語出現の遅れが2倍高く、③視聴時に親の関わりが少ない長時間視聴児では、有意語出現の遅れが2.7倍の高率であった。これらの結果を受けて、2004年に言語発達が遅れる危険性が高まるという理由で、①2歳以下の子どもにはTV/VTRを長時間見せないようにしよう(内容や見方によらず、長時間視聴児は言語発達が遅れる危険性が高まる)、②TVはつけっぱなしにせず、見たら消そう、③乳幼児にTV/VTRを一人で見せないようにしよう(見せるときは親も一緒に歌ったり、子どもの問いかけに答えることが大切)、と提言している(日本小児科学会こどもの生活環境改善委員会, 2004)。

4. 褒めること

親の肯定的・賛同的な態度は、子どもにとっては自分が「認められた・褒められた・評価された」ことであり、子どもは満足感や喜びを抱くと考えられる。Stipekら(1992)によると、1~5歳児の自己評価がどのように発達していくかを観察したところ、1~3歳児のうち、21か月以上児において社会的志向がはっきり現れており、実験者が同じことをして見せた時よりも、自分が実験者と同じことができた時に、子どもは実験者の顔を見上げ、月齢の高い方の児において、自由遊びで自分がやったことを母親に見て貰おうとする傾向が強く見られた。また、明白な成功・失敗に関しては、2~5歳児は成功した時に得意げなポジティブな反応(たとえば笑顔)を示し、失敗した時は実験者から顔を背けるなど避けるような反応が見られ、褒められることによって成功に対するポジティブ反応が増していた。勝ち・負けの競争的課題は、33か月に達しない児には理解できず、33か月以上児において、勝つことで課題

達成の喜びを大きくすることが示され、子どもは大人からのポジティブな反応を求め、失敗しないように努力する傾向が報告されている。

人は、年齢に関係なく、よいことがあったとき喜び、褒められたとき嬉しいが、これは一種の快感と言えよう。近年、脳科学の発展により、このような感情(快感)を抱く時、報酬系の脳が反応していることが明らかにされている。よいことをしたときに脳がくれる褒美であるという表現も見られる(小泉, 2006)。社会的比較(social comparison)によって得られる人の感情が脳科学的に解明されるようになり、興味深いことに、正解に対して金銭的報酬が出たときに報酬系の脳活動(reward-related brain activity)が増し、他者よりも多い報酬を得たときはさらに反応が大きく(Fliessbach, 2007)、社会的評価との関連が示唆されている。「褒められること」は社会的比較・評価の結果であるが、人の社会的行動の動機づけで重要な役割を果たす「よい評判の獲得(acquisition of good reputation)」が、金銭的報酬に反応する報酬系の脳が活性化するかどうかを、fMRI(functional magnetic resonance imaging:機能的磁気共鳴映像法)を用いて、19人に対して実験を行ったところ、よい評判を獲得したとき、金銭的報酬に反応するのと同じ報酬系の脳が反応していることが確認され(Izuma, 2008)、「よい評判を得る」というポジティブな社会的評価の獲得がさらなる動機づけとなることが示唆されている。

IV. 考察

1. たくさん話しかけること・褒めることの大切さ

以上のように、子どもにはできるだけ早期に多くの言葉をかけることが重要であることが示された。胎内にいるときから音が聞こえ、特に母親の声に出生後も大きな反応を示すことは、母が胎児へ語りかけることの意義も示唆され、今後の文献検討の課題として残される。話しかける量が多いほどよいが、質も重要であり、はっきりと正しく発音することが大切であるが、母親に特有の子ども向けのマザリーズと呼ばれる話し方には、言語発達上の大きな意味がある。マザリーズは子どもにとって耳に心地よく、特に乳児にとっては、顔の間近でゆっくりとはっきりと話しかけてくれる言葉が聞こえることが第一に重要であり、さらにその発音に伴う口の形が見えること、つまり、「目に見える言葉」が言語の習得に大切なのだと言えよう。このような状況は、親自身も子の反応を間近に見ており、

親子間には相互の表情と言葉や声の交換が行われ、相乗効果も期待できる。出生後の母と子の絆が父親より強いのは、すでに胎内にいる時から始まっている絆形成期(bonding process)の続きにあるからであり(Verney, 1981/1987)、愛着関係のより強い母親の話し方がマザリーズと呼ばれるようになったと思われる。しかしながら、子ども向けの話し方であれば、この反応は話し手が男性でも同じであったことから、父親も乳幼児に対して子ども向けの話し方をすることにより、父子間の愛着関係はより促進されることが推測される。

“no” “don’t” “stop it” などの行動に対する否定語は、単に発話や行動そのものを抑止するだけでなく、その後の言語発達や学業成績にも影響すること、つまり、乳幼児へポジティブな言葉をたくさんかけることは、知能の発達を促し、言語習得以上の効果があることが明らかにされたことは意義が大きい。親や保育者は特に心に留め置くべき重要事項であると言えよう。一方、子どもは自ら積極的に話すことを望んでいることも示され、親や保育者は子どもが発する言葉をしっかりと受け止めて、言葉や態度で反応を返すことが必要であろう。大人の場合は「褒められること」に等しい、社会的に高い評価を獲得することによって、金銭的報酬を得たときと同じ報酬系の脳が活性化することが科学的に示されているが、一方、すでに33か月以上児において「勝つこと」が課題達成で喜びを大きくし、嬉しいときに実験者や母親の承認を求めるような行動をとることが示され、褒めることは子どものポジティブな行動を促進することが明らかにされている。このとき、満足を得て、自己評価が高い子どもの脳活動も、大人と同様の反応をしていることが推測されるが、褒めるというポジティブな評価は、人を伸ばす可能性につながり、「褒めて伸ばす教育」へ応用することは、意義が大きいと思われる。

以上のように、乳幼児にたくさん話しかけること・褒めることが大切であるという直感と経験は、科学的エビデンスによって裏付けられたと言えよう。

2. 子育て支援の必要性和対応策

厚生労働省発表の人口動態統計によると、2008年の合計特殊出生率は前年を0.03ポイント上回り1.37であった。最低の1.26を記録した2005年以降連続して上昇しているが、少子社会である現状に変わりはない。一家庭当たりの子どもの数が減少し、電化製品の普及・発達や各種サービスの拡充により、子たくさん

であった一、二世世代前よりも生活ははるかに楽になっているはずである。それにもかかわらず、子育てに悩み、育児困難感を抱く女性が少なくないのは、ワーク・ライフ・バランスが取りにくい労働環境などが要因であることは言うまでもないが、育児の責任は母親にあるとする傾向が強かったことも挙げられる。しかしながら、少子化問題の深刻化や母親による児童虐待の顕在化により、行政側が「母親育児責任論」を転換し、1991年に「健やかに子どもを生み育てる環境づくりについて(健やかに子どもを育てる環境作りに関する関係省庁連絡会議)」が発表され、その後「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について(エンゼルプラン)」(1994年)によって①安心して出産・子育てができる環境づくり、②家庭における子育てを基本とした「子育て支援社会」づくり、③子育て支援策における「子どもの利益」の尊重が謳われ、「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について(新エンゼルプラン)」(1999年)によって、重点施策として①保育サービス等子育て支援サービスの充実、②仕事と子育ての両立のための雇用環境の整備、③働き方についての性別役割分業や職場優先の企業風土是正、が具体的実施計画に盛り込まれた。また、子育てと仕事の両立支援のための「少子化対策プラスワン」(2002年)では、①待機児童ゼロ作戦、②男性を含めた働き方の見直し、③地域における子育て支援、④子どもの社会性の向上・自立の促進、が進められることとなった。

母親を孤立させず、多くの育児不安感を軽減する有効策は、夫の育児参加・家事参加であり、少子化プラスワンにおける「男性を含めた働き方の見直し」は重要不可欠な緊急課題である。しかし、2007年における育児休暇取得率は、女性が前年比4.8ポイント上昇の96.2%であるのに対して、男性は0.2ポイント上昇のわずか1.3%にすぎないのが現状である(人事院職員福祉局, 2008)。

保育所併設の「地域子育て支援センター」の子育て支援活動の他に、各市町村の保健師や子育て支援員・家庭訪問支援相談員等により、「おめでとう訪問」「こんにちは赤ちゃん事業」など名称はさまざまであるが、ポピュレーション・アプローチとして乳児全戸訪問事業が行われており(樽井, 2009; 関岡, 2009)、子育て情報の提供、母子のニーズの把握、リスク要因を抱える家族への継続訪問、社会資源の周知などの活動が展開されており、各種施策により子育て支援環境が整備されてきた。

3. エビデンスに基づいた子育て支援

子育てに悩む親には、兄弟姉妹が少ない環境で育ち、子どもの扱いがわからないために困難感を抱き、子どもの成長を楽しむことができないでいることが多いと思われるが、以上の知見が示すことは、特別な技術も費用を必要とせず、子どもに目を向け、子どもと向き合い、親が自分自身を活用し、ポジティブな言葉を一言返すことから状況が変わる可能性を示唆している。子育ては、一日一日の目に見えない小さなことの積み重ねであるが、その日は二度と戻ってはこないかけがえのない一日である。一日ひとつ、子どものよいことを見つけて褒める、そして褒めることができた自分を褒めて親自身が自分に自信をもつ。女性学ではこれを「celebration(賞賛)」と呼ぶが、特に日本人女性はこれが苦手だと言われている。「親が変われば子は変わる」と言うように、子どもとポジティブに向き合う基本は、親自身が自分をポジティブにとらえられるようになることであると言えよう。

医療・看護の世界では、EBM (evidence-based medicine: 根拠(エビデンス)に基づいた医療)やEBN (evidence-based nursing: 根拠に基づいた看護)が重視されているが、科学的エビデンスに基づいた子育てというEBC (evidence-based child-rearingまたはevidence-based child-caring)があってしかるべきだと考える。先行研究の知見が、子育てのヒントとして地域子育て支援講座などで活用され、また、保育所保育士や幼稚園教諭により実践されて、子育て中の親たちに周知され、子育てに悩む親たちが少しでも前向きになれることを願う。

引用文献

- American Academy of Pediatrics, Committee on Public Education (2001): Children, Adolescent, and Television. *PEDIATRICS*. 107 (2), 423-426.
- Bloom L, Margulis C, Tinker E et al. (1996): Early Conversations and Word Learning: Contributions from Child and Adult. *Child Development*. 67, 3154-3175.
- Eliot L. (1999): WHAT'S GOING ON IN THERE? How the Brain and Mind Develop in the First Five Years of Life. 237-239, BANTAM BOOKS, New York.
- Fliessbach K, Weber B, Trautner P et al. (2007): Social comparison affects reward-related brain activity in the human ventral striatum. *Science*. 318 (5854), 1305-1308.
- Graven SN (2000): Sound and the developing infant in the NICU: Conclusions and recommendations for care. *Journal of Perinatology*. 20:S 88-93.
- 保育士養成講座編纂委員会編(2007): 家族援助論(第3版), 全国社会福祉協議会, 56-58, 東京.
- Izuma K, Saito DN, Sadato N. (2008): Processing of social and monetary rewards in the human striatum. *Neuron*. 58 (2), 284-294.
- 人事院職員福祉局(2008): 一般職の国家公務員の育児休業等実態調査及び仕事と育児の両立支援のための休暇制度の使用実態調査の結果について <http://www.jinji.go.jp/kisya/0809/ikukyu20.htm>, (clicked on June 12, 2009).
- Kemler Nelson DG, Hirsh-Pasek K, Jusczyk PW et al. (1989): How the prosodic cues in motherese might assist language learning. *Journal of Child Language*. 16 (1), 55-68.
- 小泉英明(2006): 脳は出会いで育つ(第1版), 青灯社, 東京.
- 厚生労働大臣官房統計情報部編(2009): 社会福祉行政業務報告の概要(福祉行政報告例)平成19年度, 厚生統計協会.
- Kuhl PK, Meltzoff AN (1982): The bimodal perception of speech in infancy. *Science*. 218 (4577), 1138-1141.
- 日本小児科学会こどもの生活環境改善委員会(2004): 乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です. <http://www.jpeds.or.jp/saisin.html>. (clicked on Apr. 1, 2008).
- Saito Y, Aoyama S, Kondo T et al. (2007a): Frontal cerebral blood flow change associated with infant-directed speech.

- Archives of disease in childhood. Fetal and neonatal edition. 92 (2) , F 113-F 116.
- Saito Y, Kondo T, Aoyama S, et al. (2007b) : The function of the frontal lobe in neonates for response to a prosodic voice. *Early Human Development*. 83 (4) , 225- 230.
- 関岡千津野(2009) : 保健と福祉の連携による育児支援 家庭訪問事業へのつながり, *保健師ジャーナル*, 65 (5) , 365- 369.
- Stipek D, Recchia S, McClintic S: Self-evaluation in young children (1992) : *Monographs of the Society for Research in Child Development*. 57 (1) , 1- 98.
- 樽井美樹(2009) : 保健師と子育て支援員が状況に応じて訪問, *保健師ジャーナル*, 65 (5) , 360- 364.
- 土谷みち子(1999) : 乳幼児期のビデオ試聴スタイルと子どもの発達, 第46回日本小児保健学会講演集. 226- 227 / 中井孝章(テレビを絵本に代えて 親子のシンクロニー. 14, 三学出版, 大津. 2007) より.
- Verney T, Kelly J. (1981) : *The Secret Life of the Unborn Child* / 小林登訳 (1987) : 胎児は見ている 最新医学が証した神秘の胎内生活(第1版) , 70- 71, 祥伝社, 東京.
- Walker D, Greenwood C, Hart B et al. (1994) : Prediction of school outcomes based on early language production and socioeconomic factors. *Child Development*. 65, 606- 621.
- Werker JF, McLeod PJ (1989) : Infant preference for both male and female infant-directed talk: a developmental study of attentional and affective responsiveness. *Canadian Journal of Psychology*. 43 (2) , 230- 246.